慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	二瓶恭光著 草の根の団結 : 三池における人間の記録
Sub Title	Yasumitsu Nihei, A combination of rank and files of Japanese coal-miners : a record of human impacts observed from Mitsui-Miike coal-mine dispute
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1972
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.65, No.4 (1972. 4) ,p.277(75)- 279(77)
JaLC DOI	10.14991/001.19720401-0075
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19720401-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

9月，汽車製造会社における工場協議会委員選挙のさいの反目（工場委員は友愛会側が圧倒的多数を占める）やすでにふれた関西労働組合同盟会への大阪機械労組の不参加などがある。このような出来事がかさなり，大阪鉄工組合がかつての穏健な姿勢をすてて自主的組合に脱皮しても，両派の反目はとけなかった。感情的しこりもあって，[17] むしろときとともに対立は拡大するばかりであった。

その後，総連合運動の進行にあたっても，両者の反目はかわらず，ことに9月16日には，大阪機械労組は「全国連合に大阪鉄工組合が加盟することに極力反対する」という決議を行なったほどであった。これにたいしては，しゅじゅの斡旋の動きがみられた。大阪の諸組合のほか，同じ機械工ということで機械連合も大会で下阪したさい，和解のために仲介の労をとろうとした。しかし，大阪機械労組の方はかたくなに仲介をこばみつづけた。そのため，対立は解消するどころではなく，そのような態度が逆に機械連合などを明確に反総同盟の立場においやり，たんなる非総同盟系組合を反総同盟の立場にたたせさえしたほどであった。それでも，大会前日の29日にいたり，大阪機械労組は，自組合の態度が理由で総連合大会が不成立に終ることを懸念して，先の決議の執行を一時保留することにした。

このようなあわただしいなかに，同じ29日，反総同盟側の11組合も，関西労働組合同盟会本部に集まって，最後の打ちあわせをやり，意見統一してつぎの日の大会にそなえた。いよいよ，各労働組合代表と，そのつきそいの社会主義者やアナキストたちは，勢ぞろいして9月30日の大会にそなえた。（未完）

（経済学部助教授）

注(17)　大阪機械労組の結成にさいして，鉄工組合の参加者がかなり参加したことにたいし，坂本孝三郎は「なアに，それは表面の理由で，或る事情から鉄工組合に居られなくなった2,3の不平分子が，他の会員を煽動し引張って行ったのだ」（和田久太郎前掲「暗闘の歴史」）というような感情を吐露している。

書　評

二瓶恭光著

『草の根の団結——三池における人間の記録』

昭和35年，あの三井三池炭坑における大争議が終ってから，すでに10年以上も経過し，三池争議もすでに歴史的なものになろうとしている。そしてこの大争議が日本の労働運動にたいしてあたえた深刻な影響も，その後のはげしい急速な社会経済的な変化のなかで次第にうすめられてきたように思われる。しかしわれわれは，日本労働運動にとって，未曽有ともいうべきこの争議の意義を，忘却の彼方におしやってしまってよいのであろうか。ここにとりあげた二瓶氏の著作は，ほとんど忘れかけた三井三池の労働者の状態，とくに争議以後の第1組合員と第2組合員の人間的なさまざまなまた複雑な関係を，面接による調査によってえられた厖大な資料によって分析し，社会心理学的な手法を通じて，この歴史的な争議が，三池の労働者にどのような影響をあたえ，また結果として何を残したかを明らかにしようとしたものである。その意味でこの研究は，忘れかけていた「三井三池」の意義をあらためて想いおこさせるものがある。「三池における人間の記録」という副題は，こうした著者の意図をあらわしているようにみえる。

著者は，その「はじめに」のなかで，「この研究は，けっして筆者個人が成しとげたものではない。研究の計画は，イリノイ大学のバーナード・カーシュ教授によるものであり，この計画の具体化は，故藤林敬三教授，そして著者の指導教授であった川田寿教授によるものである」という。すなわち，この研究は，慶応義塾大学産業研究所の研究スタッフおよびその関係者によって行われた面接調査によって得られた資料を，著者が，イリノイ大学労使関係研究所留学中にカーシュ教授の指導の下でなされたものである。そして最初，著者の学位論文としてまとめられたものを，訳出して発表したものである。従ってこの研究は，面接調査，資料の蒐集の面では共同作業により，その成果の上に立って，二瓶氏がその総括として分析を試みたものであるということができる。この調査研究が，どのような意図の下に，またどのような方法で行われたかは，イリノイ大学のカーシュ教授の「序」にあきらかである。すなわち，「面接対象者の標本は，三池炭鉱の坑内労働者のなかから，三池炭鉱労働組合に所属する者100人，三池炭鉱新労働組合に所属する者100人が各々抽出された」とし，さらに，「ここで，対象を坑内労働者と限定したのは，彼らこそ，炭鉱労働の中核を担っているものであり，炭鉱労働の特殊な性格をもっとも直接的に感知している労働者集団である，と判断したからである」とのべている(11頁)。また「標本抽出の方法は，両組合の三川・四山支部，計四支部で，一支部当たり50人——一般組合員45人，職場委員5人——を，支部の組合員名簿から，坑内夫を母集団として無作為抽出法をもってえらばれた」(12頁)とのべているように，一般組合員と区別して職場委員を対象として選んだことは興味深い。これは，ひとつは，この歴史的な大争議のなかで，職場委員の果した役割は大きく，組合にとっては職場活動家，会社側にとっては生産阻害者として，解雇の対象となったという事実を考えると，この標本抽出方法は，それなりに意義をもっているといえよう。

では，この調査研究は，どのような意図をもっておこなわれたのであろうか。この点についても，カーシュ教授によってつぎのようにのべられている。「炭坑夫の経験に関して，その頻度や量よりも，むしろ質についてであって，厳密な量的制御や尺度を作り出すことをしなかった。われわれは，三池争議全体を，統計や相関の抽象的な用語においてではなく，人間のぶつかり合い (human impacts) という意味で捕えたのである」とのべ，さらにつぎのように結論づけているのは印象的である。「この研究の豊かさを形成しているのは，人間の記録なのである。ここに人間主義者 (humanist) のスタイルで提示された，社会科学への貢献がある——研究の対象は，たんなる統計やその他の相対的に抽象化されたものとしてではなく，現実の，実在する人間として，生命を息づいている。われわれがここに与えられているのは，ともすれば急速な近代化と産業の波の中で忘れられがちな労働者の，そしてときには，彼らの人生の多くの部分が，地底において過されるという理由により，ほとんど完全な人間以下の存在とさえ考えられている労働者の，希望と恐怖，喜びと悲しみ，笑いと涙をえがいた一幅の絵である。」(15頁)

本書は，七章から成っている。第1章研究の目的と方法，第2章日本の炭鉱とその組合，第3章炭鉱および

労働の意義，第4章ストライキにおける炭鉱労働者，第5章組合運動の意義——対立組合の比較，第6章炭鉱労働者における組合運動の意義——国際比較，第7章その後——三池炭鉱再訪問となっている。第3章は，炭鉱労働そのものにたいする労働者の考え方を示すものとして非常に興味深い。第一組合員の間でもっとも多かったのは，明らかな否定的態度，たとえば「これはみじめで，しかもとても危険な仕事だ」，「労働条件が悪い」という否定的な態度が圧倒的であるのにたいし(50パーセント)，第二組合員にかんしては，はっきり否定的に答えた者の数は比較的少い(約25パーセント)ということである。この異なった2つの意見の存在の重要性については，著者も指摘されているが，これが，その後の労働者の行動を決定的に区別した価値観の差と関連があるかどうか，著者は問題を提起している。

しかしもっとも重要なものは，第4章であろう。ここには，この組合分裂が労働者にどのような影響を与えるか，そして人間として彼らをいかに変えたか，この点についてまことに克明な分析がなされており，本書のなかでもっとも読みごたえのある部分である。しかし私はこの部分でもっとも衝撃をうけたのは，つぎのような第一組合員の答えであった。「第二組合にいく前，彼らは私の友人だったので，今でも会えば，あいさつだけはします。私も人間ですから，彼らを憎まずにはいられません。しかし，彼らのことを個人的に考えると憎むことができないんです。私は第二組合を憎みますが，個人としての一般組合員は憎みません。第二組合の幹部——彼らが悪いんです」(99頁)(傍点筆者)。個人として，はげしく憎んでいるのではないのだろうか。憎んでいてもこれを露骨に云わずに，きびしい自己抑制の感情が働いており，「タテマエとホンネ」の日本人に特有な論理が支配しているのではなかろうか。それとも本音なのであろうか。私には少くとも屈曲した労働者の複雑な感情の反映であるように感じられる。憎くても憎んではならないという（組織の再統一のために！）抑制された彼らの感情が色濃くにじみでているように思われる。少くとも，ヨーロッパやアメリカの労働者のストライキ破りにたいする感情とは異ったものであるように思われる。この点，著者はどのようにお考えであろうか。著者の御教示をえることができれば幸である。

第5章は，第4章を補足する意味で重要であるが，とくに石炭産業の将来に第一組合員がやや楽観的であるのにたいして，第二組合員がきわめて悲観的であるのはまことに印象的である。しかしもっとも注目すべきものは，第6章炭鉱労働者における組合運動の意義——国際比較，であろう。ここで著者は「伝統としての組合運動と新しい制度としての組合運動」，「炭鉱居住地域における団結」，「会社」，「炭鉱労働者と炭鉱」，「炭鉱労働者と組合」，「炭鉱労働者とその組合の組織的側面」，「組合の業績」，「炭鉱労働者とストライキ」，「将来への希望」および「組合の消滅」についてふれているが，率直な感想をのべさせていただくならば，この章は，本書の結論的な部分であり，もっとも重要なところであると思われるにもかかわらず，もっとも迫力を欠くものとなっているのは遺憾である。著者が，「国際比較」と称する以上は，アメリカの炭鉱労働者の実態を把握し，とくに具体的に，事例的にひとつの大争議をとりあげ，これとの比較を徹底的に追求すべきではなかったろうか。この点が，この研究の大きな限界をなしていることは疑いえないところであろう。二瓶氏の研究が，「人間の記録」として，三井三池における人間像の追求，人間関係の探求にあるならば，日米の炭鉱労働者の争議にのぞんでの態度が，もっと克明に分析されてもよかったのではなかろうか。

また，さらにいうならば，三井三池の労組の争議について，アメリカの労働者はどのように感じていたのであったろうか。第二組合という形での分裂について，彼らがどのような意見をもっているか，こうした点が，まさしく「国際比較」の観点から事例的に比較することが出来たのではなかったろうか。

以上，このすぐれて実証的な研究について筆者はかんたんにコメントを加えたのであるが，以上のような批判にもかかわらず，本書は，あの歴史的な大争議の生生しさを私に再びよみがえらせたという点で，まことに衝撃的であった。その意味で著者はもちろんのこと，この調査の完成に全力をつくされた方々に深い敬意を禁ずることができない。二瓶氏が，この研究をいわば「ふみ石」として，その研究を大きく前進させることを期待してやまない。

これを書いているうちにも筆者は，1960年7月（6月だったかもしれない）三田の教室で，第一組合の中山さんが，塾生に向って訴えたときの感動的な姿を忘れることができない。世話人の塾生が，資金カンパは，只今，～円と叫ぶと，それまで精力的に演説していた中山さんは，「有難うございます」というと，演壇で絶句して男泣きに泣き出したのである。あれから十数年，高度成長政策の波は，おそらく容赦なく中山さんの運命をも襲い，彼の前途をも大きく変えたにちがいない。中山さんは，第一組合員の活動家だったが，いまどうしているであろうか。(日本労働協会，1971年2月刊，B6，184頁，460円)

飯田　鼎
(経済学部教授)

佐野 稔著

『イギリス産業別組合成立史』

I．従来，労働組合運動はクラフト・ユニオン（職能別組合）から産業別組合へという発展の型をとるものだという前提認識の下に，それと対置された日本の労働組合が企業別組織であり，従って交渉力としては極めて弱体であることが指摘され，かつまたその形態の脱皮が焦眉の課題であるとされてきた。

ところが，企業別組合の「連合」形態はあっても，日本の労働組合はむしろその枠組の中で高度成長の波に押し流され，物価上昇の機構にはめこまれた形の運動をしているのが現状である。そして今や，この高度成長そのものの終焉とともに，改めて労働組合のあり方が問われようとしている。日本の労働者階級はいったい如何なる道を模索するのだろうか。

この方向を明確にするためにも，我々はイギリスが典型とされるクラフト・ユニオンから「産業別組合」に至る労働運動の歴史を，総体としての資本主義の発展，衰退の中で実証的に分析しておかなければならない。具体的な資本蓄積の中にのみ労働者の生活が，又抵抗の基盤があるからである。

ここにとりあげる佐野稔氏の著書は，第I部で，イギリス鉄道労働組合が様々な条件，契機から「産業別組合」を結成していく過程を明らかにしており，第II部は，労働党の成立史とオズボーン判決の意味と結果を扱ったものである。著者の問題意識が日本の現状をふまえた上で，一見迂遠に思われるイギリス労働運動史研究から，逆に現実へのアプローチを試みようという点にあることはいうまでもない。その意味でこの著書は我々の研究の礎石でもある。以下，内容を追ってみていこう。

II．第I部第1章，「イギリス鉄道における労資関係」では，鉄道労働者が資本との関係において，「原生的」にいかなる規定性をうけざるをえなかったかが分析される。すなわち，イギリス産業革命の展開が，資本の流通過程担当部門として新たな運輸手段である鉄道を生みだしたことを述べ，それが巨大な固定資本を要するところから当初から株式会社という「近代的企業形態」をとっていたことが明らかにされた後，この鉄道業が設立投機，株式投機を伴いながら発展，拡張をほぼ1870年までに終えたことを資本蓄積の面からまず言及している。そして次に鉄道の労資関係の極めて特殊な様相が明らかにされる。

つまり，鉄道業はその労働力をほとんど男子青年労働力に依存しており，雇用形態は全て常用労働であって，労働移動が少なく，多岐にわたる職種の中で熟練の養成が徒弟制度によらず，企業内訓練によっておこなわれていた。労働者は従って，若年労働力として雇用されたあと，企業内訓練過程を経て，次第に熟練労働者として昇進していく階梯機構の中に配置されるのである。これは当時の綿業労働者とも，またクラフト・ユニオンの熟練工とも異っていて興味深い事実である。

さて，こうした労資関係を基礎にして各個別資本が共通してとった労働政策は，「軍隊的秩序」の維持と「恩恵的」譲歩の二面(11頁)をもっていた。前者は徹底した団結禁止にみられたし，後者は従業員の苦情を個人による陳情制度としてくみあげる形で実施されていた。著者によれば，この資本の労働政策という外枠の中で終身雇用制も，年功賃金制も採用されていたのである。すなわち企業忠誠という前提の下で，労働力の供源が縁故者，退役軍人，農村労働力に求められ，その労働力が「忠誠度」を基準とした昇進管理＝賃金管理によって資本の下に抱摂されていたのである。そして又これらを補足する形で，社宅制度，制服支給，強制的な共済組合への加入などが設定されていたことが明らかにされている。

賃金と労働時間に関しては，前者が企業内昇給に従って，熟練職種(主要には機関車運転士)と他の間には相当な格差があったけれども，全体的には比較的高賃金であったのに対し，後者はこれも職種ごとに複雑な違いがありながらも，平均12時間という長時間労働であった。このように労働条件が劣悪でありながらも，相対的に高賃金であったこと，何よりも，好・不況にかかわらず雇用が安定していたことは，労働者をして企